小川和紙（国重要無形文化財、ユネスコ無形文化遺産）伝統手漉き技術の学習と普及に関する地域連携事業

下田　敦子　准教授
（人間生活文化研究所）

1. 事業の目的と位置づけ　本事業では、埼玉県比企郡小川町に伝承されてきた手漉き和紙の技術と文化を題材に、地域連携活動としてその理解と普及に取り組んでいる。小川町の手漉き和紙（細川紙）は、国の重要無形文化財、ユネスコ無形文化遺産に指定されている日本の代表的な伝統的手仕事文化であり、地域の歴史や暮らしと深く結びつきながら継承されてきた。本事業は、こうした地域の文化資源について、現地の方々に学びながら理解を深め、その価値を大学内外に伝えていくことを目的としている。同時に、本事業には博物館学芸員養成課程の学生が参加しており、この活動は、将来博物館で和紙が用いられている資料を扱う際に必要となる、和紙の特性や製作背景についての理解を得る機会にもなっている。博物館には、古文書、書簡、絵画、版画、民俗資料など、和紙が用いられている資料が数多く収蔵されている。学芸員は、こうした資料の調査、保存、展示、教育普及に携わることになるため、和紙という素材の特性やその製作背景について具体的に理解していることが必要である。しかし、和紙の原材料や製作工程にまで立ち入って理解する機会は、養成課程の中で必ずしも十分ではない。そこで本事業では、小川町との連携のもと、楮の栽培、収穫、加工から和紙文化の理解へとつながる実習を継続して行い、その成果を和綴じや手帖づくりのワークショップなどを通じて広く共有している。

2. 現地実習の実施　本年度は、小川町における現地実習を継続して行った。6 月に予定していた楮畑での芽かき作業は雨天により延期となったが、7 月初めに小川町青山地区の楮畑で実施することができた。小川町の関係機関および和紙製作に携わる熟練の方々の指導を受けながら、成長した楮の枝払い作業に参加し、楮栽培が自然環境のなかで営まれていることを実感した。また、小川町における楮栽培の畑が限られた規模で維持されていることも知り、原材料生産の現場が少数の担い手によって支えられている現状をあらためて認識した。7 月下旬には、学生とその保護者の参加も得て、再び楮畑での作業に参加し、前年収穫した楮を用いた「楮ひき（かずひき）」の作業にも加わった。この作業では、乾燥保存された楮を水でもどし、黒皮や甘皮を削り、白皮を選別する工程に実際に取り組むことで、和紙が原材料の丁寧な準備によって成り立っていることを具体的に理解する機会となった。現地では、作業場で卒業証書用紙の製作も行われており、和紙が現在も社会の中で生きた素材として使われていることを知る機会にもなった。

3. 普及活動としてのワークショップ　本事業では、現地で得た知識や経験を大学内外にひらく方法として、和綴じや手帖づくりのワークショップを継続して行っている。楮の栽培から紙漉きに至るまでの工程は専門性が高く、長い時間を要するが、ワークショップは、和紙という素材に実際に触れ、その特性や魅力を多様な参加者に伝える入口となっている。現地実習と普及活動とを往還させることによって、本事業の内容を具体的な形で社会にひらいている。

8 月 9 日の『大妻夏休み講座 2025』では『手帖づくりワークショップ』を開催し、学生 12 名が指導にあたり、来場者は 150 名であった。10 月 18 日の『地域連携交流会（本学千代田キャンパス）』でも同ワークショップを実施し、164 名の参加があった。さらに翌年 2 月 22 日にはカトリック女子修道会幼きイエス会（ニコラ・バレ／千代田区六番町）において修道会のシスターの方々11 名を対

象に、3 月 5 日には千代田区立高齢者総合サポートセンターかがやきプラザ『楽楽ひろば』において 53 名を対象に『手帖づくりワークショップ』を開催した。参加者からは、学生の説明が丁寧で楽しかったとの感想が寄せられた。3 月 15 日の『大妻さくら祭り 2026（千代田キャンパス）』では、会場を人間生活文化研究所セミナールームに移して開催し、来場者は 114 名であった。本会では手帖づくりに加えて、完成した手帖を収めておくための、たとう（帙）づくりにも取り組んだ。子どもから高齢者まで幅広い世代の来場があり、和紙を介して多様な人々が交流する場となった。

4. 広報と学生参加　本年度は、『紙すき通信（本プロジェクト代表者・下田敦子編）』を、年間を通じて継続的に配信し、第 6 号まで発行、配信した。楮畑での作業、楮ひき、小川町技術継承者との交流、ワークショップの実施状況などを記録し、関係者への広報に役立てた。本プロジェクトに参加する学生については、本活動を基盤として立ち上げた『日本伝統工芸文化研究会』のメンバーを中心に現在 27 名が活動しており、技術指導の補助、受付、材料準備、会場運営などを分担して担っている。前述の『大妻さくら祭り 2026』は 4 年生にとって在学中最後の行事となったが、卒業後も母校を訪ねるよりどころとなるよう、今後も定例のワークショップとして続けていきたい。また、ワークショップの実施にあたっては、人間生活文化研究所職員、関係者の協力を得て、受付、記録、会場運営等の体制を整えた。学生にとっても自分たちの活動が多くの人の協力によって成り立っていること、また、それぞれの立場で役割を果たす人々の仕事ぶりに接する機会となっている。

5. 地域連携の広がりと今後の展望－千代田区と小川町

本年度は、大妻女子大学地域連携推進センターが主宰する地域連携事業の一環として、かがやきプラザ相談センター麹町（千代田区）との連携が実現し、職員の方々が 2 月に 4 名、小川町和紙体験学習センター（埼玉県小川町）での楮の『かしき（楮を煮熟し繊維を取り出す工程）』に参加した。本学周辺地域の方々が実際に小川町を訪れたことは、本事業が地域と地域とを結ぶ役割の一端を担っていることがうかがえる。また、ワークショップの開催を通じては、千代田区社会福祉協議会、社会福祉法人東京栄和会、三番町町会、千代田区立千代田図書館などとの交流も広がった。本事業は、和紙という素材と技術について、原材料の栽培から加工、活用、普及に至るまでを一体的に扱う地域連携事業である。同時に、それを担う博物館学芸員養成課程の学生にとっては、素材への理解を深め、対人対応や運営協力を実践のなかで積み重ね、将来の博物館活動に必要な基礎を具体的に身につけていく機会にもなっている。今後も小川町との協働を継続しながら、和紙文化の理解促進と地域文化の継承に資する持続的な事業として育てていきたい。本学と連携当地『小川町』との位置関係は図 1 のとおり。

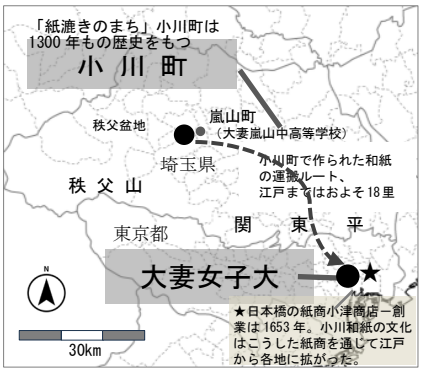


図 1. 活動場所（埼玉県比企郡小川町）は大妻女子大学千代田校より北西約 70㎞に位置する.

6. 実施体制　本事業は大妻女子大学人間生活文化研究所を実施主体とし、小川町の関係機関および和紙製作に携わる熟練の方々の協力のもとで進めた。連携当地では小川町和紙体験学習センター、小川和紙工業協同組合、小川町役場関係者ならびに手漉き和紙の技術継承に携わる方々から、製紙に関する指導と助言を受けた。学内では人間生活文化研究所職員が会場設営、準備、学生対応等を担い、事業運営を支えた。また、博物館学芸員養成課程の学生および本活動を基盤として立ち上げた「日本伝統工芸文化研究会」の学生メンバー（27 名）が、現地実習への参加、ワークショップでの技術指導補助、受付、材料準備、運営補助等を分担した。さらに退職職員および関係者の協力も得て、受付・記録撮影・会場警護等の支援体制が整えられた（唐崎秀芳氏、森嶋大祐氏）